

Pūrvayoga (過去の因縁)

——大乘経典における過去世物語に関連して——

村 上 真 完

目 次

- 一、はじめに
- 二、パールの用例 (pūbhayoga)
- 三、マハーヴァスツにおける用例
- 四、大乘経典における用例
その一、Saddharmapuṇḍarīka (法華経)
- 五、大乘経典における用例
その二、Saṃādhirāgaśūtra (月燈三昧経)
- 六、大乘におけるその他の用例
- 七、pūrvayoga の語義 (総括)

一、はじめに

大乘仏教の興起は、インドの宗教史、ひいては文化史上、重大な出来事であるにもかかわらず、その興起の事情については、不明なことがらも多く、未解決の問題も少なくない。

ここに、pūrvayoga (かりに「過去の因縁」と訳す) をとりあげるのは、その語意を明らかにするとともに、この語が指示する過去世物語の性格を明らかにし、ひいては大乘経典の成立や、その性格に関する考察の手がかりを得たいと考えるからである。なお、この語がこのような意図のもとに、とりあげられたことはないようである。^①

この語の語意については、一応辞典類^②および、翻訳文献に

も、その訳語が示されてはいる。しかし、その語の指示する意味内容について、学界において、必ずしも十分に理解されてはいないうらみがある。

そこで、まず *purvayoga* の語意および、その指示する具体的内容について、くわしく資料(サンスクリット、パーリの原典、漢訳、チベット訳)にあたって検討してみることにあらはじめる。

註(一) 昭和四三年十月六日、日本宗教学会において、私はこの問題にふれた。「*Purvayoga* についで」『宗教研究』一九八(その要旨)を参照せよ。

(二) これほどの辞書の中で、この語について参照したものを、左に記す。

Monier Monier-Williams, *A Sanskrit-English Dictionary*, New edition, Oxford 1899 (以下 *MS*) *purvayoga* を辞書中の *pratyaya* の *pratyaya* として

Richard Schmidt, *Nachträge zum Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung von Otto Böhtlingk*, Leipzig 1928.

Franklin Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. II. Dictionary, New Haven, 1953 (以下 *BHSD* と略記する) (これはサンスクリット資料を網羅し、その解釈もおおむね妥当であり、非常に参考になるものがある)

Purvayoga (高井の因縁)

荻原雲来編『漢訳対照梵和大辞典』9 (監修 辻直四郎、編纂主任 大類純) 鈴木学術財団、一九六五(これは漢訳語をあげており、大いに参考になる)

パーリ語の辞書として

F. W. Rhys Davids and William Stede, *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, Part V, London, 1923 (以下 *PTSD* と略記) (*pubhayaoga* の項。その説明は少しく要領を得ないようにも見えるが、出典もあげてあり、参照する価値を失わぬ。)

なお私には未見であるが、右の辞書には

H. Kern, *Toevogesen op 't Woordenboek van Childers*, 2 pts (Verhandelingen Kon. Ak. van Wetenschappen te Amsterdam N. R. XVI, 5), Amsterdam 1916. を引く(Kern, *Toev. 2* 略記 *pratyaya*)

水野弘元『南伝大蔵経総索引』昭和三四、三五、三六年

二、パーリの用例 (*pubhayaoga*)

purvayoga にあたるパーリ語は *pubhayaoga* である。これについて、*PTSD* にも出典があげられており、また、水野弘元『南伝大蔵経総索引』にも、出典の指摘がある。いまその一々の個所を検討してみることにしよう。

『ツリンダ王の問』 *Milindapanho* (ed. by V. Trenckner)

の「序話」には、ミリンダ王の居城のあるサーガラ市の叙述に続いて、『(以下)で(上述の話を)止めて、彼ら(ミリンダ王とナーガセーナ)の前生の行為(pubbakamma)が語らるべきである。それから語るには、六種に分けて、語るべきである。』(Trenchner ed., p. 216-17)と言って、この経の主題の目次にあたるものを示している。その中の第一がpubbayoga(過去の因縁)である(p. 218)。そして

Pubbayogo ti tesaṃ pubbakammāṃ (p. 223) (過去の因縁

とは、彼らの前生の行為「業」である)*

と。いってから、過去(前生)の物語を始めるのである。その物語の内容はこうである。

過去のカツサバ(迦葉)仏のときに、ある沙弥(ミリンダ王の前生)が、比丘(ナーガセーナの前生)の言いつけを無視したために、その比丘に怒られ、打たれたが、世々に「大威力あるように」「弁舌の才があるように」という願いをたてた。一方その比丘も、この沙弥に負けないような「弁舌の才があるように」と願いをたてた。後に、沙弥はミリンダ王に生まれた。彼は賢明であり論客として近づきがたく、彼と対論して疑いをとくことのできる者はいなかった。そこで

比丘教団は彼と対抗できるものを求めて、三十三天にいる天子マハーセーナ(＝ナーガセーナ)に白羽の矢をたて、天子に人間界に生まれることを懇願した。その天子はバラモンの家に生まれた。一比丘の努力によって、彼は出家し、論を学んでそれに通曉したが、慢心をおこしたために、師僧にたしなめられ、ミリンダ王を論破すれば、許す、といわれる。のちに彼は三蔵を学んでから、比丘教団の命をうけて、王を論破すべく、サーガラに出かける。一方、王は、一長老比丘を質問によって沈黙せしめて、自分と対論できるものはない、と思ったが、大臣の言によって、ナーガセーナ比丘があることを知って、結局、対論すべく、ナーガセーナのところにあずねてゆく(pp. 2—24)。

以上が「序話」(Bahirakatha 外粹物語)であり、まさしくpubbayoga(過去因縁)にあたるものと考えられる。その内容は過去世(前生)の物語と、それに関連ぶかい現世(今生)の物語とを含んでいるが、いずれも、話題になっている時点よりは過去である。

pubbayoga を何と訳すか。

T. W. Rhys Davids は 'The Questions of King Milinda

(The Sacred Books of the East, vol. XXXV), London 1890 p. 43 に於て Their previous history (Pubba-yoga)

(彼らの以前の物語)と訳してゐる。

同氏と W. Stede とは P.TSD (Part V, 1923) には

“former connection”, i. e. connection with a former body or deed, former action (and its result) (△以前の結合関係▽すなわち、以前の身体あるいは行為との結合関係、以前の行為(△その結果△) という訳語を示している。ここに「Yogaを「結合関係」と解したのである。この解釈は以後の翻訳に影響を与えている。すなわち

金森西俊訳『弥蘭王問経』上(『南伝大蔵経』第五十九卷上)昭和十四年(一九三九)七頁には、「前生との結合」と訳し、

中村元・早島鏡正訳『シリンドタ王の問』1、昭和三八年(一九六三)五頁に、「前生と△現生と▽の結合関係」と訳してゐる。

△か△ I. B. Horner: *Milinda's Questions* vol. 1. (Sacred Books of the Buddhists, vol. XXII), London, 1964, p. 3 に於て Former History (以前の物語)と訳してゐる。^⑨

Purayoga (過去の因縁)

この経の漢訳に『那先比丘経』があるが、この序話にあたる部分は相当に異なっており、pubbayogaにあたる訳語も求められず、その物語の内容も殆ど異なる。^⑩ここに、序話の部分はおかれて成立したものであらうとされている。

この経の pubbayoga の用例は「pubbayogaを pubbakamma (過去の行為、業)と規定している点と、前生から今生にいたる「過去の因縁」の物語に冠する題名を用いている点で、注目すべきものである。とくに、第二の点は、後にみる『マハーヴァスツ』や大乘経典の例に一致するものである。

『ジャータカ』(Jataka, 本生経、本生物語)の散文の部分(Jatakathavannana)にも pubbayoga の用例がある。

第五四七『ヴェッサンタラ・ジャータカ』(Vessantara-Jataka)には、シヴィ大王の王子、サンジャヤの第一の后であるプサティ(Phusatī)について、

Tassāyaṃ pubbyogo (Jataka vol. VI, p. 480¹⁰⁻¹¹) (彼女の過去の因縁は次のようである)^⑩

とあり。その内容は、ヴィパッシン(Vipassin, 毘婆尸)仏に供養をした二人の王女があったが、その姉は「仏の母となるように」という願を立てて、その後、輪廻をくりかえし、

カッサパ(迦葉)仏のときに、キキ王の王女にもなり、後に天に生まれ、帝釈天の第一夫人となったが、人間界に生まれてくる際に、帝釈天に十種の恩典(vara)を選ぶことを許され、シヴィの王の後となること、布施をすることを喜び名声高い子を産むこと等を願って、王女プサティーに生まれ、長じては、シヴィ大王の王子、サンジャヤの後となり、ヴェッサンタラ王子(≡仏の前生)を産む。以下にヴェッサンタラ王子の話が続くのである。

ここで、pubbayogaの内容は、彼女の前生から、今生にいたるまでの因縁(物語)であろう。

第五三七『マハースタソーマ・ジャータカ』(Mahāsuttasama-j.)には、人食い(porisāta)が威力あることについて、
 „kuto pan' assāyaṃ tejo" ti pubbayogato (Vol. V, p. 476¹²) (彼の威力はどこから由来するのか、という)と、過去^①の因縁からである。

といい、彼が前生で迦葉仏のときに、比丘教団に布施をしたから、威力があるのだと、簡単にのべている。ここではpubbayogaは過去の因縁の力(影響)を指しているようであり、またpubbakamma(宿業、過去の業)であろう。

『無礙解道』(Paṭisambhidāmagga, II, pp. 202-3)にはpubbayogasaṃpanna(過去^②の因縁を成就している、具足している)という語が用いられている。

『無礙解を得る二(種類)の^③人がある。一人は過去^④の因縁を成就し(pubbayogasaṃpanna)他方は過去^⑤の因縁を成就していない。過去^⑥の因縁を成就したものは、それゆえにすぐれたものであり、勝ったものであり、殊勝なものであり、彼の智は開展する』(II, 202)

という。ここでも前と同様に、過去の因縁の力を示しているものであろう。

ブッダゴーサの『清浄道論』(Visuddhimagga)には、それによって四無礙解が明浄となるものとして、pubbayogaをあげ、

『過去^⑦の因縁(pubbayoga)とは、過去の諸仏の教えにおいて、往復修習することによって、随順や種姓(の境界)の近くまでの、観(毘鉢舍那)の修行(vipassanāyoga)である』(Harvard Oriental Series, vol. 41, p. 374; PTS, ed., p. 442)

と云う。ここには「過去の因縁」の中、とくに「観の修行」

をあげたものであろう。

以上、パーリ資料の中から *pubbayoga* の例を五個所あげて検討した。いずれも、古い原始仏教聖典の例ではなく、その中の三例は、ブッダゴーサの著作にみえるものであった。

その意味は、「過去の因縁」というまとまった話の表題（主題）として用いるもの（初の二例）と、「過去の因縁」の力、影響力をとくにとりあげるもの（後の三例）とに分けることができよう。後者の場合は、『シリンドタ王の問い』にもあったように、「過去の業」(*pubba-kamma* 宿業、前生の業)に同じであらう。しかし、いままで見たところでは、「過去の業」としても、よい意味で用いられている。

註*以下において他の語に区別するために *pubbayoga*, *purvayoga* および、その訳語にアンダーラインを付し、または傍点を加えることがある。

- (1) Otto Schrader : Die Fragen des Königs Menandros, Berlin, 1905 ; Nyānatloka : Die Fragen des Milinda, München 1919 など、その訳語がみられる。また L. Finot : Les questions de Milinda, Paris 1923 は未見。
- (2) 『那先比丘経』(大、三二)では、那先(ナーガセーナ)の前生は、釈尊より教を聴いた象王であり、後に婆羅門に生

Purvayoga (過去の因縁)

まれて出家し、「羅漢泥洹道を求めんと欲す」と念ずる。

一方、近くにあつて彼と交際のあつた婆羅門道人は、国王となる願をたてる。そして後者は国王の太子と生まれ弥勒(シリンドタ)という。前者は那先となる。(以上はパーリ伝とはまったく異なる)。以下那先の出家と修行について記すが、師僧の名(*Rohana*—楼漢、比丘教団の指導的地位にあつた長老の名(*Assagutta*—頰波日)が似ている外は、話はかなりちがう。しかし、いづれにせよ、那先は智慧ならぶものない比丘として、王のいる舍竭国(サーガラ)に来る。一方王となつた弥勒はならぶものない論客として、一沙門(野 羅—*Ayupala*)を破る点も、パーリとは一致するが、王の使者の言に答えて、那先は王の所に到る、という点はパーリと逆である。以上のように、内容は殆ど異なるが、序話は両方にあり、また「過去の因縁」の物語を付すという点でも両者は同じ傾向を示しているといえよう。

- (3) E. B. Cowell and W. H. D. Rouse (tr.) : 'The Jataka Vol. VI. London 1907, p. 247, Her former connexion with the world was as follows (彼女の世間との過去の結合関係は次の通りである。)

Julius Dutoit : *Jatakam VI. Leipzig 1916, S. 601. Die Vorexistenz von dieser war folgende (この女の過去の生は次の通り。)*

『南伝大藏経』第三十九卷、二六三頁(高田修訳)、「彼女

の前身との結合は次の如くである」

(4) E. B. Cowell(ed), H. T. Francis (tr.): The Jataka vol. V, London 1905, p. 259, Whence, it may be asked,

came this glory of his? From his devotion in a former existence (前身における献身(専心))

J. Dutot, Jataka V. Leipzig 1914, S. 522, Woher kam ihm aber dieser Glanz? Durch eine frühere Bemühung. (以前の努力)

『南伝大蔵経』第三十七卷、二八九頁(高田修訳)「この威力は何処から来たかと云ふに前身の業からである」

(5) 『南伝大蔵経』第四十一卷(渡辺照宏訳)一四六頁は「宿縁を成就し」と訳し、「宿縁 (pubhaya) とは宿業と言ふに同じ」と註記する。

(6) 前記の渡辺氏の訳に主に従う (pubhijjati をシヤム本に *pubhijjati* と訂正してある)

(7) Pe Maung Tin: The Path of Purity, Part III, London 1931, p. 513 "Former application" is effort for insight through constant devotion to the religion of the Buddhas until one has approached the knowledge of Adaptation and of Adoption(「過去の専念」とは、適應と公認との智に近づくまで、諸仏の宗教にこねに献身(専心)することによる、洞察への努力である。)

『南伝大蔵経』第六十四卷(水野弘元訳)一一頁、「宿行とは過去の諸仏の教えに於て往復勤修せしことによりて、

随順や種姓の附近にまで及ぶ所の観(毘鉢舍那)の修行なり。」

三、マハーヴァスツにおける用例

仏教(混濁)サンスクリット Buddhist (Hybrid) Sanskrit をもって記された、雑然とした仏伝『マハーヴァスツ』(Mahāvastu, 大事、以下 *Mo* と略記)にも、*purvayoga* の用例があり、セナール E. Senart の刊本の索引にも指摘され、またエジャートンの BHS D にも指摘されている。またその語は単独で用いられるものの外、複合語をも構成している。いまはまず前者より見よう。

セナール刊本第一卷二六七頁には、諸々の天神、龍神や諸王が、仏に傘蓋をかざすのを見て、その由来をたずねる比丘たちに、世尊は『比丘たちよ。これは如来の過去の善法の威力 (*paūrāṇasya kuśaladharmasya anubhāvo*) である』と答えてから、詩人でもある長老ヴァーギーシャに対して、
“*pratīhantu te Vagīṣa tathāgatasya pūrvayogo*” (I. p. 267a-11) (ヴァーギーシャよ。汝に如来の過去の因縁が明らかとなれ。汝は如来の過去の因縁を思いうかべよ)。

という。これに答えて彼が説く詩句には、過去の仏の入滅の後に造られた塔に、その仏の父であった婆羅門（|| 釈尊の前身）が、傘蓋をたてて供養し、そのむくいによって、以後、悪趣に生まれず、天や人間に生まれ、最後の生において仏となる。そしてその婆羅門の弟子が彼（ヴァーギーシャ）であったというのである。ここに説かれる過去生の出来事の物語が、pūrvayoga（過去の因縁）の内容をなすものであり、その出来事とその影響力が pūrvayoga と呼ばれるのであらう。

同じ第一卷三二七—三三八頁には、仏の前身チョーティパーラ（Jyotipala）の物語が記されている。迦葉仏のときに、壺作りガティカーラ（Ghatikara）の執拗な誘いによって、はじめは反対していたチョーティパーラも、迦葉仏に会って説法を聴き、のちに出家して、「仏とならう」という心をおこし、迦葉仏によって、将来、仏になる、という予言（授記）をうけた、というのである。この話は、はじめの方では Jyotipalasūtram (p. 335^a) と書いて、一段落を示しているが、その後にも、彼が迦葉仏に布施を行い、仏とならうという願をおこし、仏に授記をうけ、後に天に生まれ、また多くの諸仏のもとで出家したことが述べられる (pp. 335-338)。

Pūrvayoga（過去の因縁）

そしてこのあとに

eteṣu pūrvayogā prakṛitā śāstano daśabalasya (p. 338^a)

（十力の師（|| 仏）の過去の因縁がこれらにおいて語られた）^②

という。

第三卷には、表題（尾題）として pūrvayoga を冠する章が二つある。すなわち

samaptam Padumāvatīye pūrvayogam (III. p. 172^a)（パ

ドゥマーヴァティーの過去の因縁おわる）^③

Rahulabhadrasya pūrvayogam (III. p. 175^a)（ラーフラハ

ドラの過去の因縁）^④

の二である。ともに、章題であるから、まず過去の因縁の物語であろうと考えられる。

第一の話は、ヤショーダラー（Yasodharā, 耶輸陀羅）の前身としての、パドゥマーヴァティーと、シュツドダーナ（Suddhodana 淨飯）王の前身にして彼女の夫ブラフマダッタ（Brahmadatta）との話 (III. pp. 153-170) の後に付されるものである。パドゥマーヴァティーの足跡からは蓮花が生

えるのであったが、彼女が讒言によって夫王のために死地

に送られるときには、蓮花は生えず、また死を免かれて王に

迎えられたときには、蓮花が再び彼女の足跡から生えたとい

う。それを聞いて、比丘たちが釈尊に、『何の業のむくいに

よって (Kasya karmasya vipakena)』(III. p. 170¹¹) そうな

のか、と問うと、次のような『業のむくい』があったといっ

て、過去の物語が語られる。彼女はその前生に下女として蓮

花を運んでいたところ、ある辟支仏に会うと、信心をおこし

て、その花をさしあげた。すると彼女の手が萎縮するのを見

て、その花をとりかえず。すると辟支仏の手が萎縮するのを見

て、再び辟支仏に花を奉った、という。そして、蓮花を

辟支仏に与えた『業のむくい』によって彼女の足跡に蓮花が

生えたのであり、辟支仏から蓮花をとりかえした『業のむく

い』として、彼女が死地に送られたときには足跡から蓮花は

生えなかったが、再び辟支仏に花を奉った『業のむくい』と

して、後では再び彼女の足跡に蓮花が生えたのだ、というの

である。そしてこの話の終わったあとに、表題すなわち尾題と

して、『パドウマーヴァティーの過去の因縁。おわる』という

のである。「過去の因縁と訳した pūrvavāyoga は、(1) 1) びは、

いわば業報物語でもある。

第二の話は、ラーフラ (Rāhula 羅睺羅) が六年間母胎にあ

ったのは『何の業のむくいによるのか』(III. p. 170⁵)という

問いに答えるものである。昔二人の王子があったが、父王の

死後、兄のスーリヤ Sūrya (釈尊の前生) は弟のチャンドラ

Chandra (羅睺羅の前生) を王位につけて、自らは出家して

仙人となる。あるとき与えられない水を飲まない決心をし

ていたが、ついに他の仙人の水壺の水を飲んで、後に後悔し

て、弟の王のところに処罰を求めてやってくる。弟は罪には

ならないと説明するけれども、兄はきかないので、森の中に

坐所をしつらえ食事を給して兄をそこに六夜とどめて、七日

目に大赦を宣言して、兄の罪悪感を除いた、という。ここで

六夜兄を森にとどめた『業のむくい』によって、羅睺羅は六

年間母胎にあったのだという。以上の表題として『ラーフラ

パドラの過去の因縁』といわれるのである。ここでも、業報

の觀念が強くとめられる。さらに、パーリの例ではみられ

なかったものであるが、ここでは、わるい「過去の因縁」も

pūrvavāyoga とよはれていることが知られる。

複合語としては

krītapūrvayoga (過去の因縁を作った) III. p. 406¹¹

pūrvayogasaṃpanna (過去の因縁を成就してゐる) II. pp.

259¹¹, 287¹³, III. p. 320^{2,3}, 407¹⁵

の二がある。

まず第三巻のヤシヨーダ (*Yasoda*, ハーリーでは *Yasa*) の物語を見ると、豪商の息子ヤシヨーダについて、その美德を列挙する中に、*krīta-pūrvayoga* (過去の因縁を作った)^⑧といふ (III. p. 406¹¹)。また彼の形容として *pūrvayogasaṃpanna* (過去の因縁を成就している、具足している)^⑨といふのである (III. p. 407¹⁵)。しかしその「過去の因縁」の内容は明示されていない。もっとも、その後の *Yasodajāṭaka* (III. pp. 413-415) がそれであると、見做すことはできると思う。彼がその生前において貧しい家に生まれたが、辟支仏に供養をして、誓願 (*prañidhāna*) を立て、富貴に生まれることと、出家者の法 (徳) を得ることを願った、その『業のむくいによつて』 (*karṁasya vipākēna*)、彼は富貴に生まれ、力を得たのだという。このような話は、さきに見た二例では *pūrvayoga* と呼ばれてゐるが、*krīta* は *jāṭaka* (本生) とよばれてゐる

Pūrvayoga (過去の因縁)

のである。

pūrvayogasaṃpanna の他の例はいずれも積尊の形容として用いられてゐる。

第二巻の、積尊の成道前後を記す、第一の *Avalokīta nāma sūtra* (所観という経) には、淨居天 (*Suddhāvāsa deva*) が「随喜をなすべき十八の法 (|| 根拠) を得る」とつて、成道直前の積尊のすぐれた特性を列挙する中の、第一に *pūrvayogasaṃpanno mahāśramaṇo* (II. p. 259¹¹) (大沙門は過去の因縁を成就している)^⑩といふ。

また、成道を記したあとに、淨居天が魔 (*Māra*) に八十 (種類の言い) 方でどなる、という中に、積尊の特性を列挙してゐる。そこに、第三番目に

evanrūpāṅ sa tvāṅ pūrvayogasaṃpannā bhavanti (II. p. 287¹²⁻¹³) (この「積尊の」ような衆生は過去の因縁を成就してゐる)^⑪

といふ。(もっとも、ここでは複数をを用い、直接積尊を指す表現ではない。)

第三巻の初転法輪を記す個所には、

Ye te satvā pūrvayogasampanna bhavanti te ārya-
dharma-cakram pravartenti | aham khalu pūrvayoga-
sampanno tena-arahamy aham āryadharmā-cakram pra-
vartayitum | (III. p. 320²⁻³) (およそ過去の因縁を成就し
ている人達が、聖なる法輪を転ずる。実に私も過去の因縁
を成就している。それゆえに私は聖なる法輪を転ずるに備
する。)

といっている。

この釈尊に関する「過去の因縁」が具体的に、それぞれ何を指しているのか、明示はない。しかし、仏の前生の物語は『マハーヴァスツ』にも、多く録されている。そういう前生物語を漠然と予想するものであるにちがいない。

註(1) 英訳には J. J. Jones (tr.), *The Mahāvastu* 3 vols, London

1949, 1952, 1956 (以下単に英訳としようのちこれを指す)

かあなか、この個所を Let there come to your mind,

Yagisa, the recollection of a former association of yours

with the Tathāgata (I. p. 222) と訳す。former association

… with (誰々との過去の関係) が pūrvayoga の訳語であ

るが、適切ではない。次に述べられる物語が、釈尊の前生

における行為が中心であって、ヴァーキーシャのそれは、最後に附随的に述べられるにすぎない。したがって、その物語 (pūrvayoga の内容) を「ヴァーキーシャと釈尊との間の古からの関係」と見ることが適切ではならぬ。

F. Edgerton は BHSD の pūrvayoga の項において、右の個所を引き let a previous life of the T. recur to your mind と訳しているのは適訳である。またセナルが reunion antérieure (古の結合関係) というのが、その語の意味に本来のものであると想定しているのは、間違ひである。エジャートンは言ひ、英訳者ジョーンズはセナルの説に従ったものらしい。

(2) 英訳 The association of the Master, the Daśabala, with

these in his former lives has thus been related. (I. p.

285) は適切でないであろう。英訳は「釈尊と過去の諸仏

との古き関係」の意味にとっているが、上にみたように、話の中心は釈尊の前生における行為であろう。なおエジャートンはこの個所に previous lives or adventures in them の訳語(説明)を与えている。

(3) 英訳 Here ends the story of a former birth of Padumavati

(III. p. 167) は「文脈上無難であるが、その註記と(III. p.

167, n. 1) Pūrvayoga, "former association," i. e. circum-

stances in a former birth, and especially association

with a former Buddha or Pratyekabuddha とうい

は、支持であらぬ。その理由は、この物語の中心は彼女の

前生の行為であつて、辟支仏との関係は必ずしも主題ではなからざるからである。

- (4) 英訳 Here ends the story of a former birth of Rahula the Fortunate (III. p. 170) (4) なみだこ こじは「過去の仏との関係」は全然語られてゐない。ちかてみた、英訳者の説はこじでは全然あつてはからならわけである。

- (5) 英訳 who... has achieved a previous association with a Buddha (III. p. 406) は適切ではない。また註 (p. 406 n. 3) は、前記 (註1) のヒシャーメンのマナルの説 (réunion antérieure) に対する反対説を引きながら、「しかし文脈はむしろ——ネじつ、おやうへつこねだ——そのちかんな関係を意味してゐる。」とらいつ、シモンズはマナル説に加担してゐるのだから。しかしそれは適切ではない。

- (6) 英訳 because of his association with a Buddha in a former life (III. pp. 407—408) 同註記 (III. p. 408 n. 1) Literally, 'being endowed with a previous association.' は適切ではない。ヒシャーメンは「この複合語に対して、perfected in (thru) previous lives といふ。

- (7) 英訳 the Great Recluse has knowledge of his associations in his former lives (II. p. 245) 之は、knowledge を補足したものでないが、この解釈は適切ではない。またこの註記 (6) Literally, 'is gifted with a former association.' も同様。なお同註では「Purvayoga は本来 association Purvayoga (過去の因縁)

with someone or something in a former existence を意味する。しかしそれはまた単に former existence とつて用ゐられる。一方 Milp. 2 ではそれや pubbakamma とつて説明してゐる。また、むしろ文脈は knowledge (or memory) of associations in former lives の意味が与へられるのを要する。ところが、association やつて貰へる、つて結論は適切ではない。

- (8) 英訳 Beings like him have Knowledge of former lives (II. p. 270) 同註 (n. 10) Literally 'are endowed with a former association.' 之は適切ではない。

- (9) 英訳 "Those beings," said he, who have had association with former Buddhas? set rolling the noble wheel of dharma. Now I have had association with former Buddhas, and therefore I am worthy to set rolling the noble wheel of dharma (III. p. 309) (同註 n. 2. Literally, 'are endowed with former association.') は不適切。「過去の諸仏との関係をあつたと解してゐるが、「過去の諸仏」を補ふ必然的理由はない。(これはこの用例について同様。)

四、大乗經典における用例

その1、Saddharmapūṇḍarīka (法華經)

次に大乗經典における purvayoga の用例を見ることが、その第一に Saddharmapūṇḍarīka (ed. by H. Kern and

B. Nanjio, 以下 SP と略記) をとりあげる。この漢訳としては、竺法護訳『正法華經』、鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』、闍那崛多共笈多訳『添品妙法蓮華經』(いずれも大九。以下それぞれ、正法華、妙法華、添品法華と略記) がありチベット訳として、Suren-drabodhi の Sna-nam Ye-ses sde との共訳 Dam-pahi chos pad-ma dkar-po shes-bya-ha theg-pa chen-pohi ndo (『影印北京版西藏大藏經』No. 781, Vol. 30, 東北 No. 113) がある。以下においては、漢訳やチベット訳を出るだけ参照しようかと考える。

この SP には pūrvayoga を冠する章(二品)名が三つある。即ちその第七、第二十二、第二十五章がそうである。

まず第七章の最後には

ity aryasaddharmapūṇḍarīke dharmaparyāye pūrvayoga-parivarto nāma sapṭamah || (p. 19811) (以上、聖正法

蓮華法門における過去の因縁の章として第七〔章〕)

と云う。チベット訳は dam-pahi chos pad-ma dkar-po-las

|| shon-gyi sbyor-bahi lehu shes-bya-ste | bdun-paho ||

(『影印北京版西藏大藏經』vol. 30, p. 36e²⁻³ = fol. 86b²⁻³)

とあって、ほぼ同意である。(shon-gyi sbyor-ha は「過去の

つながり」というほどの意味である)。竺法護訳(正法華卷四)では「往古品第七」(大九、八八中)という。尤も、『妙法華』(卷三、大九、二二上)、『添品法華』(卷三、大九、一五六下)では「化城喻品第七」といって、名称を異にする。

しかし第八章のはじめには、

imam ca pūrvayogapratīsamuktam kathān śrutvā (p. 1992²⁻³) (またこの過去の因縁にちなんだ話を聞いて)

と云う、チベット訳は shon-gyi sbyor-ha dan ldan-pahi g'tam

ndi ... thos-nas (p. 36e⁴⁻⁵ = fol. 86b⁴⁻⁵) と云う、同意であ

り、『正法華』(卷五、九四中)には、「追省往古所興立行」と、『妙法華』(卷四、二七中)及び『添品法華』(卷四、一六二上)には「復聞宿世因縁之事」というから、どの本

も前章には、「過去の因縁」を説いたものとして、伝えているのである。

さて、「過去の因縁の章」(Pūrvayogaparivarta) の内容を見よう。

はるかに遠く過去の世に、大通智勝(Mahāvijñānabhīṣṭu, 以下羅什の訳語を借用する)仏が出現した。その仏の子であった十六人の王子は、父の成仏を聞いて、仏前にいたり、成

仏の教えを説かんことを願ひ、また十方の梵天も説法を懇請したので、仏は四諦十二因縁の法を説き、多くの声聞衆が出現した。十六王子は沙弥となり、これに満足せず、さらに成仏の教えを請う。そこで仏は法華経を説いた。王子たちはこれを信受して、仏が禪定に住している時に、人々のために法華経を説き明かした。この十六王子は今、それぞれ、東西南北四維の仏として成仏した。その中には東方の阿闍仏、西方の阿弥陀 (Amitayus) もあり、第十六は釈迦牟尼仏である。

以上が「過去の因縁」と呼ばれる内容であろうと考えられるが、経はここに法華経をもって教化したのは、実に過去の世からのことであることを、強調しようとしたもののようにである。経はさらに、二乗の教えによって涅槃を得るものなく、唯一仏乗によってのみ、真の涅槃を得る、ということを強調し、それを明らかにするために、化城の譬喩が示される。ここでは、二乗は、いわば、険難な遠路を珍宝の処に向つてゆく旅人が、途中で疲労のあまり、引きかえすことがないように、と一導師が神通によって化作した都城のようなものだ、というのである。

羅什訳はこの後の方の化城の喩を、この章の表題としたも

Purvayoga (過去の因縁)

のであるが、『正法華』、サンスクリット本、チベット訳は、「過去の因縁」を題目にしている。恐らくは、「過去の因縁」と呼べるべき内容は、この章の前半なのであろう。

ここでは、過去のある行為に依じて、現在成仏したので、という外に、過去の世から法華経が説かれてきたのだ、という二つの要素が、「過去の因縁」の中に考えられるのである。

第二章 (サンスクリット本) は

Bhaiṣajyārjya-pūrvayogaparivarta (p. 422i) (薬王の過去の因縁の章)。

といい、チベット訳は sman-gyi rgyal-pohi snon-gyi shpor-bahi lehu (vol. 30, p. 74b^s - c^t = fol. 180a^s - b^t) (同意) といひ、第二章である。『正法華』は「薬王菩薩品」(巻九、大九、一二五上) といひ、第二十一の章である。『妙法華』と『添品法華』では「薬王菩薩本事品」といひ、それぞれ第二十三、第二十二の章としている (ともに巻六、大九、五三上、一八七下)。

昔、日月淨明德 (Candrasūrya vimāla prabhāsāśrī) 仏があらわれ、一切衆生喜見 (Sarvasattvapriyadarśana) 菩薩及

び菩薩や声聞の衆に、法華經を説いた。一切衆生喜見菩薩は、苦行精進して、現一切色身三昧を得たところ、これは法華經を聞いた力であると思つて、仏および法華經を供養せんとして、自分の身体に香油をそそいで火を点じて燈火として捧げた。のちにその菩薩は王家に生まれ、またその仏に親近した。仏は彼に法を託して入滅されたので、彼は八万四千の塔を造つて、さらに自らの腕を燃やして燈火として供養した。この一切衆生喜見菩薩は今の薬王菩薩であるという。

この後に、法華經讚美の文が続くのであるが「過去の因縁」は以上で終つたものと考えられる。この章の後の方には

bhaisajjarāja pūrvaṃ oga parivarta (pp. 418^s, 419^e, 420^s, 421^r), sarvasattva priyadarśanasya bodhisattvasya mahāsattvasya pūrvaṃ oga parivarta (p. 420^r) 薬王菩薩往古学品、薬王菩薩往古品 (『正法華』、大九、一二六下、一二七上)

薬王菩薩本事品 (『妙法華』、大九、五四中、下、五五上、『添品法華』、大九、一八九中、下)

といつて、上述の「過去の因縁」に言及している。それゆゑに「過去の因縁」という部分は、本来、この章の前の部分に

限るものであらう。

第二章 (サンスクリット本) は

Subhavyūharāja pūrvaṃ oga parivarta (p. 471^s) (妙莊嚴王の過去の因縁の章)⑥

といひ、チベット訳は *rgyal-po dge-ba bkod-pahi shon-ge-yi sbyor-bahi lehu* (p. 81e² = fol. 199a²) (同意) *nyan-gu* 第二章である。『正法華』は「浄復浄王品」(卷一〇、大九、一三〇下、但しその註⑥によれば三本、宮本では「住世浄復浄王品」とする。なお住世は往世ではあるまいか)といひ、第二章である。『妙法華』と『添品法華』は「妙莊嚴王本事品」といひ、それぞれ、第二七、第二五章としてゐる(ともに卷七。大九、五九中、一九四中)。

昔、雲雷音宿王華智 (jaladhara garjitaghosasusvaranak-satrarājasaṃkusumitābhijña) 仏が出現し、法華經を説いたときに、仏に帰依してゐる浄徳 (Vimaladatta) 夫人および浄蔵 (Vimalagarbha) 浄眼 (Vimalanetra) の二子の力によつて、妙莊嚴 (Subhavyūha) 王は、仏に帰依し、仏によつて、将来、娑羅樹王 (Śalendrarāja) 仏になるという予言

(授記)をさずけられて、王は出家し、法華經を修行した。さて、妙莊嚴王は今の華徳(Padmasri)菩薩、淨徳夫人は光照莊嚴相 (Valrocanarasmipratimanditadhvajaraja) 菩薩、二子は藥王 (Bhaisajjaraja)、藥上 (Bhaisajyasamudgata) の二菩薩である、という。

ここでは善知識の大切なことを示すものであるが、とにかく、以上を単に Pūrvayogapariṅgata (p. 471³) (過去の因縁の章)と称している。『正法華』では「往古宿世本所行」(大九、一三二下)と称している。(但し『妙法華』と『添品法華』は「妙莊嚴王本事品」大九、六一上、一九四中。)

なお以上のように SP では過去物語に pūrvayoga を冠するが、avadāna (譬喩)とか itivṛtaka (本事) 又は jātaḥ (本生)とは呼ばないのである。

なお、第八章には、pūrvayogacārya^⑤ (p. 199³) という語がある。これは「過去の因縁の行」と訳しうるであろう。但し、チベット訳は snon-gyi sbyor-ba (≡ pūrvayoga) (p. 37a1 = fol. 87a1) というのみであり、『正法華』には「古世事」(大九、九四下)とあるが、他にはない。

以上によって、『法華經』の用例をほぼすべて見た。そして、漢訳及びチベット訳の相当語をも指摘できた。

ここで、SP における pūrvayoga の解釈に関する諸学者の説にふれておきたい。SP は古くから知られた経典であり、数種の翻訳もあり、この語の意味についても、それぞれ関心がはらわれてきたはずである。

ビュルヌフはこの語を l'ancienne application (古の専心)と訳し^⑥、ケルンは ancient devotion(古の専心専念)と訳している。尤もケルンは、この語の本来の意味は pre-history(古史、前歴)であろうともい^⑦。また、ancient history(古史、昔物語^⑧)とも註記している。モニエル・ウィリアムズは、おそろくはじめて、その辞書に SP に出るこの語をあげて、olden time, history of o't. (昔時、昔の物語)の説明を与えている。またシュミットは PW の補遺^⑨を作ってこの語を載せ、Vorzeit, Vorgeschichte (前時代、前の物語)の訳語を与えている(彼が引くのは SP および Samadhirāja である)。私はこの二つの辞書のあげる意味は無難なものであるかと考える。エジヤートンはビュルヌフやケルンの訳語を排して、a former existence, of Śākyamuni and others,

under an ancient Buddha と云々 (BHSD)。妥当な解釈であろう。もともと漢訳には、往古(竺法護訳)、『本事(羅什訳)の外に、宿世因縁之事(羅什訳)』という、意味深長な訳語があることに留意したい。

註(1) H. Kern, *The Saddharma-Puṅḍarīka or The Lotus of the true law*, SBE, XXI, London, 1884, p.153 には ancient devotion と訳す。尤も註記には pūrva yoga の本来の意味は pre-history であるといふ。私見によれば後者の方が適切である。なおケルンが yoga を yuga から導こうとする説は、なお問題を残しているようだ。最近の岩本裕『法華経』(中)(岩波文庫、昭和三九年)には『前世における関係』の章と訳している(九二頁)が、意味は明らかではないようだ。

(2) ケルン訳 On hearing ... the foregoing tale concerning ancient devotion (p. 191)

岩本 訳「また前世に於ける関係にまじわる物語を聴き」
 『法華経』(中)九三頁)

(3) ケルン訳 Ancient Devotion of Bhāishagyaṛāga (p. 376 章題)、本文中では Chapter of the Ancient Devotion of Bhāishagyaṛāga (pp. 389, 391, 392) と云々。

岩本訳『「バイシヤジャラーシャの前世に於ける関係」の章』(『法華経』(下)二二二頁)。但し本文中では『…の前世の関係』と云う章とも訳している(二〇五、二〇

七、二二二頁)。

(4) ケルン訳は単に Ancient Devotion (p. 419) を章題とするが、註記には、「むし ancient history」とする。私見によれば、註記の訳語の方が適切であろうと考えられる。

岩本訳「シユバールヴェーハ王の前世に於ける関係」(下、三二五頁)

(5) ケルン訳 ancient course (p. 192)

岩本訳「前世からの関係に基く修行」(中、九三頁)

(6) E. Burnout, *Le Lotus de Bonne Loi*, 2 Vols, Paris 1852 には未見。BHSD による。

(7) 一の註(2)(三三頁上)参照。

五、大乘經典における用例

㊦『Samādhirājasūtra (月燈三昧経)』

Samādhirājasūtra (N. Dutt (ed), Gilgit Manuscripts,

Vol. 2, 以下 SB と略記)、『漢訳『月燈三昧経』(十卷、那

連提耶舍訳、大十五)は、法華経ほど古い經典ではな[㊦]。ま

たその漢訳および六・七世紀のギルギット写本(C)には pūrva yoga の語は少ないが、増広されているネパール写本

(A、B)とチベット訳(影印北京版 No. 795, vol 31-32,

東北 No. 127)にはその語が多く見られるのである。しかし、

とくに古い材料とはいえないが、用例が多いという点で、一考する必要があると考える。

SR には *purvayoga* の語が十八回くらい用いられているが、その中の二回を除いた、他の十六回は、章の名称、物語の題名に関連している。いま SR の章の順序で一々指摘し、その指示する内容をも見てゆきたい。

まず第二章はその冒頭に

『そのとき実に世尊は月光童子に、まさにこの(次のような)「過去の因縁の章」(*purvayogaparivarta*)を、一層大がかりに、詩句をうたうことによって、詳細に説き明かしたのであった』(p. 257⁴)

という。チベット訳もほぼ同文であるが、*purvayoga* を必ず *snon byun-ba* (過去に起ったこと) vol. 31, p. 257⁶ = fol. 98⁷) と訳している。しかし漢訳は単に「爾時世尊而説偈言」(大正五、五五二上)というのみで、*purvayoga* にあたる語がない。最後にあげる例を除いて、漢訳にはこの語にあたる訳語を欠くのである。

さて、その章の終りの尾題には

Purvayoga (過去の因縁)

iti Srisamadhiraṅge Saṅkhararājapūrvayogaparivarto nāma dvitīyah (p. 321⁵) (以上聖三昧王(経)における娑羅樹王(仏)の過去の因縁の章と云う第二(章))

というが、A、C 写本では *Saṅkhararājaparivartah dvitīyah* (p. 32 n. 7) とし、チベット訳も *Sa-lahi dhan-pohi rgyal-pohi leñu-ste gñis-paṅo* (p. 276⁶-⁶ = fol. 10b⁵-⁶) といつて、A、C 写本に一致する。漢訳には相当部分がない。

さて、とにかく、この第二章の内容を *purvayogaparivarta* と呼ぶ所伝があるから、その内容を見よう。

昔、耆闍山に居られ、この三昧を説かれた諸仏の最後の娑羅樹王 (*Saṅkhararāja* 以下固有名詞は那連提耶舍訳による) 仏のときに、私 (|| 釈尊 ||) は毘沙謨達 (*Bhismottara*) と云う王であった。多くの精舎を作り、仏に供養をなし、この三昧を求め、後に出家して、この三昧を問ひ、この三昧のこの章を受持した。この三昧を求めて、手、頭、妻、子、財宝、食物を捨施した。

このあとに、この三昧を得る人の条件を示し、この三昧を受持する功德を記し、この三昧の受持を勧める。しかし、*purvayoga* の内容を求めるとすれば、前半の過去物語である

う。SRではこの語には、過去の出来事、物語とともに、とくに「この三昧」(この経の主題となる三昧)の受持が語られるのである。

第五章の中間にも、前記の第二章初とほぼ同じ文があって、以下の詩句に説く部分を予想して *pūrayogapariivarta* (p. 62¹⁶)と云っている。

昔、声徳(Ḫhosadatta)仏が出現したときに、大力(Mahabala)王と堅固力(Drdhadala)王とがあつて、大力王は財施をもつて供養するが、仏は法供養||修行を教える。ここに、王は眷属とともに出家し、仏はこの三昧を説いた。のちに大力王は智勇(jñanasūtra)如来となり、彼の諸眷属は同じ名の堅固大精進(Drdhasūtra)仏となった。

なお、経は、この経の受持を勧めることをもつてこの章をおえる。

第八章のはじめの散文の部分の終りに(詩句の部分の直前に)、A、B写本及びチベット訳は、以下の詩句の内容を予想して、*pūrayogapariivarta* (過去の因縁の章)と云う。

(p. 91 n. 1)。

昔、無所有起(Abhāyasmudgata)仏があらわれたとき、大悲思惟([Mahā]karuṇācintin)王子は、この三昧を聴いて出家し、のちに、善思議(Sucintitartha)仏となった。

この物語はすでにその前の散文の部分にも説かれていたものであったが、更に詩句に要約して説かれたのである。

第十六章は *Pūrayogapariivarta* (p. 214⁵) というが、A、B写本及びチベット訳が冠している、はじめの散文の終りにも、次の詩句の内容を指示して、

pūrayogakathānirdeśa (p. 206 n. 1) (snon byun-bahi g'tam bstan-pa, vol. 31, p. 294⁶³ = fol. 56b³) (過去の因縁の話の説示)

という。また次の第十七章初の散文(A、B写本)にも *pūrayogakathāpariyavasāne* (p. 215 n. 1) (過去の因縁の話の終りに)

と云っている。これは第十六章の内容を指すのである。さて、その内容はこうである。

昔、師子幢(Simhadhvaṅga)仏のときに、私(釈尊)は黠慧(Maṅ)という王子であったが、不治の病にかかった。そ

のとき、師であった賢施 (Brahmadatta) 法師は、私にこの三昧を説いた。それを聞いて、私は諸法の自性を悟って、そして病気もなおった。その比丘はのちに然燈 (Dipaṅkara) 仏となった。

経はさらに、この三昧の受持を命じ、後の世における比丘たちの墮落を語って、彼らを信ぜず、修行を堅固にすることを勧める。しかし、「過去の因縁」といふべきものは、その前半であろう。

第十七章でも、その主要部をなす詩句の前に、その内容を指示して、pūrvayogakathānirdeśa (p. 220^{o-9}) (過去の因縁の話を説示) といひ、続く詩句では、過去の諸の仏の名をあげ、釈尊はこの諸仏に供養したという。

ここで A、B 写本及びチベット訳では、再度散文を挿入し、pūrvayogaparivarta (p. 227, n. 2) の語をもって、以下の詩句の内容を指示する。

善勝音王 (Narendraghoṣa) 仏のときに、功德力 (Sīribala) (|| 釈尊の前生) という王があり、仏前にいたり、この三昧をきいて、眷属と共に出家した。王は後に死んで、堅固力

Pūrvayoga (過去の因縁)

(Dīpādalā) 王と大智慧 (Mahamati) とを父母として、王家に生まれ、すぐに、仏が在してこの三昧を説かれるかどうか、をたずねる。続いて父王と共に仏前にいたる。父王は、この三昧を聴いて、王位をすてて出家し、後の世に蓮華上 (Padmottara) 仏となった。王と共に出家した人たちは、善調伏智上 (Anantañānotara) 仏となった。そして功德力は私 (|| 釈尊) であった。私 (|| 釈尊) は長い間努力し、この三昧を求めた。

以上が「過去の因縁」の内容であろう。

第二十章にもその詩句の部分の直前に、

pūrvayogakathānirdeśa (p. 283 n. 4, A, B 写本。 ṣṇon

byun-ba bstan-pa, vol. 31, p. 302 c⁴ = fol. 75b⁴)

といひ、その内容を指示する。ここでは、過去の因陀羅幡幢王 (Indraketuḍhvaṅgarāja) 仏が、この寂靜なる三昧を説いた、というのである。

第二十一章は pūrvayogaparivarta (p. 295ⁱⁱ) というが、その初に、A、B 写本およびチベット訳が冠する散文の終り

にも、

pñvayogakathābandha (p. 287 n. 1.) (snon byun-bahi
gtam-gyi rgyud, p. 302e⁵ = fol. 76b⁵) (過去の因縁の話の
つながり)

を説きあかした、という。その内容は次の詩句にいうものである。

昔、二人の長者の子があつて、ともに出家して森に住み、説法師となつた。そして狩にやつて来た王に説法をする。後に悪い比丘たちが、法師を無きものにしようとして、王をそのかすが、王は天神のいましめによって思い止まる。悪い比丘たちは王の弟と組んで、法師を攻めるが、龍や夜叉のために亡ぼされた。

A、B写本及びチベット訳によれば、その法師の一人は然燈仏、一人は私(≡釈尊)であり、王は弥勒、天神は月光童子、王の弟は提婆達多であつた、という。

第二十九章のはじめにも、

pñvayogakathāparivarta (p. 357¹⁴) (snon byun-bahi
lehu, vol. 32. p. 1b¹ = fol. 101b¹)

といつて、その内容が詩句をもつて示される。

昔、威徳衆王 (Tejaganiraja) 仏が、この三昧を説かれていたときに、堅固徳 (Dīrhadatta) という王があつて、仏前にいたり、この三昧を聴いて、出家した。以下月光童子への説明が続くのであるが、その王は私(≡釈尊)であつたこと、このすぐれた三昧を求めて、私は諸仏に供養し、戒をまもり、子・妻・頭・手足・眼・財宝を捨施したことを説き、この三昧の受持を勧めめる。

第三十四章^⑥には、智力 (Jñānabala) 王の王女智意 (Jñānavati) が、その師の美意 (Bhūtamati) という説法師が、腫物のために、死に瀕したときに、王の夢の中にあられた天神の教えを聞いて、自分の身体の肉と血をとり、法師に肉を食べさせ、血をもつて法師の腫物を洗つて、恢復せしめたという話である。

王女の説く詩句の後に、A、B写本及びチベット訳には、散文を挿入して、この(次の)

pñvayogakathānidarsana (p. 483 n. 3) (snon byun-bahi
gtam nes-par bstan-pa, vol. 32. p. 13d⁷ = fol. 132b⁷) (過

去。の因縁の話の顯示)

を詩句をもって説き明かした、という。そこでは、布施の中で、身体(の一部)を施すのが、すぐれたことであることを説き、その王女はそれから死んで、多くの諸仏に会い、女身をはなれて、説法師比丘となった。さて、智力王は弥勒、法師は然燈仏、王女は私(≡釈尊)であったという。

第三十五章には、昔、善花月(Supuspaandra)法師が、多くの菩薩たちの止めるのもかえりみず、都に出て法を説いたが、勇健得(Suradatta)王(≡釈尊の前生)のために惨殺され、時に王は懺悔して法師を葬い塔を作った、という。

このあとに、釈尊自身が述べる詩句が続くのであるが、その直前に、A、B写本およびチベット訳では、pūrvayogakathānirdesa (p. 526 n. 1) を説き明かした、と云うのである。その内容は釈尊自身が昔、勇健得王であり、悪業をなしたことの次第と、その懺悔の気持を述べたあとに、善花月は蓮花上仏、法師を殺すのに手を下した者は寂王(Santirāja)仏であった、というのである。

第三十七章初の散文の終りには、

Pūrvayoga (過去の因縁)

『それから実に世尊は、そのときに月光童子に、まさにその意味を明らかにして、まさにこの(以下の)過去の因縁の話の説示(pūrvayogakathānirdesa)を、詩句を歌うことによつて、説き明かしたのであった』(p. 563¹⁻²)
という。ここにだけは漢訳相当文もあって、

「爾時世尊復欲顯示此三昧功德利益、說其菩薩本昔所行、亦為顯現增長長月光童子力故、說己本緣、以偈頌曰」(卷九、大15、六〇九中九一一)

という。この「本縁」が pūrvayoga の訳であろう。なお漢訳でも宋、元、明本および宮本では、この前に「本因品第五」(大15、六〇九註④)というが、これは pūrvayogaparivarta の訳語ではあるまいか。さてその内容はこうである。

昔、衆自在(Gaṇeśvara) 仏のとき、善華(Varapuspasunāman)王は仏よりこの三昧を聴いて出家した。王には福慧(Puṇyamati)という王子があり、称光(Yasaprabha)と云う比丘がこの三昧を説いた。その比丘は悪い比丘達に迫害されるが、よく忍び、忍辱の力によつて諸仏があらわれるのだと説いた。称光比丘は釈尊であり、福慧王子は弥勒、善華王は蓮花上仏であるという。なおこの後、童子に対する説法が

続く。

以上 *SR* において、過去の出来事・物語に関して、*pūrvayoga* という例を、すべて見た。もっともこの語の多くは、後に増広・付加された部分に見出されるものではある。しかし過去世物語そのものは *SR* の主要な部分をなすものである。その内容は仏の前生話を中心とし、過去世においても、

この三昧 (*SR* の主題) が説かれ、受持されたことに、関心がはらわれている。さて、その仏の前生物語では、*SR* でも *SP* と同様に、*jātaka* とは呼ばれていないことを、指摘しておく。*SR* では *jātaka* の語は全然用いられていないのである。

なお *SR* には *pūrvayogakausalya* (pp. 191, 639⁴) (*Shon byūn-ha-la mkhas-pa*, vol. 31. p. 274d⁵, 32 p 32d⁵) とする語があり、漢訳は「於三前際方便」(五五〇中七)、「前際善巧」(六一八上二〇)であり、これは、『前生を想起することと多聞とである』(p. 639⁶)と説明されている(漢訳「自識」宿命多聞故」大15、六一八上二〇)。

註(1) 拙稿「*Samāhiraśāstra* の本文発達について」(『印度学仏教学研究』第14巻第2号)、「*Samāhiraśāstra* の成立に

ついて」(同第16巻第2号)参照。

(2) K. Reganey, Three Chapters from the *Samāhiraśāstra*, Warsaw 1938, p. 70 ¹⁶ this chapter concerning the ancient times と訳している。

(3) 註(1)にあげる第二の拙論参照。

六、大乘におけるその他の用例

pūrvayoga (過去の因縁) が、過去の出来事を主題とする章(物語)の名称、表題として用いられる例の大半は、*SP* (法華経)と*SR* (月燈三昧経)に見られた。ここではその類例を更にもとめ、次にこの語の別な用例をも見てゆこう。

Rāstrapālāpariprechā (ed. by L. Finot, 以下 *RP* と略記) 闍那崛多訳『大宝積経「護国菩薩会」』のコロファンには (p. 605⁻⁶)

iti Pūnyarāśmeh saṭpuruṣasya *pūrvayogasūtraraharā-jān samāptam* ⑥ = (善丈夫徳光の過去因縁経王おわる。) *āryarāśtrapālāpariprechā nāma mahāyānasūtram samāptam* = (聖護国所問という大乘経おわる)

という。この最初の名称に対してはチベット訳も漢訳もないが、僅かに竺法護訳『徳光太子経』(宋元明三本によれば頼

吒想羅所問徳光太子経)の経名が、それに近い。しかし RP 第二章は *purvayoga* (過去の因縁) にふさわしい内容をもつ。

昔、吉義 (*Siddhārthabuddhi*, 以下竺法護訳を用いる) 仏が出現したとき、頗真無 (*Arcaśmat*) 王の王子、徳光 (*Pun-yarasi*) は、王宮の歓樂をかえりみず、仏のもとにいたり、法を聴き、後に仏の入滅後には、宝塔を作つて供養し、後に出家して精進したという。さて王は無量寿如来、王子は釈尊自身であつた、と結ぶのである。なおここでも仏の前生話であつても *jātaka* とは称していない。また RP 第一章末には仏の前生話を五十あげながら、*jātaka* の語を一度も用いてないことは、注意するに足るようだ。

『金光明経』 *Suvarṇaprabhāsa Sūtra* (ed. by H. Idzumi) p. 115 (J. Nobel, *Suvarṇabhāṣottamasūtra*, Leipzig 1937, S. 125) には、

『この金光明最勝王経から、せめて一つの比喩 (*ekadr̥ṣṭi-ānuta*) でも明らかになつて、せめて一つの章 (*ekaparivarta*) があるは一つの過去の因縁 (*ekapūrvayoga*)、あるは、せめて四句の偈、せめて一句でも、金光明最勝王経から、

他の衆生に説いて聞かせるならば』

という。「章」と「四句の偈」の中間に挙げられているから、*ekapūrvayoga* は聖典の一節と考えられる。その語の漢訳は曇無讖訳では「一縁」(大一一、三四六上、三八九上)、義浄訳では「一昔因縁」(大一一、四四〇中)と訳されている。

チベット訳のうち、漢文(義浄訳)の藏訳と伝える *Chos-grub* (法成) 訳(影印北京版 No. 174) では、*shon-gyi gte-ma-nyud geig* (一つの過去の話の連がり、vol. 7, p. 88² = fol. 119b²) と訳すが、他の二本(影印北京版 Nos. 175, 176)では *shon byun-ba* (過去に起つたこと、vol. 7, p. 60a⁵ = fol. 251a⁵, p. 90a⁵ = fol. 35b⁵) と訳してゐる⁹。

こちらに同経ノールン刊本の第十七章は

Jalavāhanasya matsyavaineya-pūrvayoga-parivartah (p. 201a⁹) (流水(長者)の魚教化という過去の因縁の章)

とあり。もともと泉刊本 (p. 184) には *purvayoga* の語を欠き、漢訳でも「流水長者子品」(曇無讖訳)、「長者子流水品」(義浄訳)という。しかし法成訳以外のチベット訳二本とも *Chu-hbebs-kyis gdul-baḥi ḥaḥi shon-byun-ba*, *Chu-hbebs-kyis ḥa btul-baḥi shon-byun-ba* (影印北京版 vol. 7, pp. 69

63, 98a^o)と云って、ノーベル刊本に一致する。その内容は、昔、流水長者(釈尊の前生)が衆生の病苦を救い、また枯涸した池の魚群のために水を運び、食物を与えて、魚を救い、さらに魚のために宝勝仏の名を称説し、十二因縁を説いて教えたところ、後に魚はそのために切利天に生まれたというのである。なお、この経でも仏の前生話をジャータカとは称していない。

以下において、直接過去物語の題名と関係のない *pūrvayoga* の用例を見よう。

般若経類では、*Pañcavimsatisāhasrikā Prajñāpāramitā* (ed. by N. Dutt) p. 301²; *Satasāhasrikā-Prajñāpāramitā* (ed. by P. Ghosa) pp. 97⁹, 15, 98², 9, 15, 22, 99⁷, 14, 20 1)

『かの諸仏世尊の過去の因縁を伴う菩薩行 (pūrvayogasa-hagatā bodhisattvacaaryā, snon-gyi sbyor-ba dan ldan-pahi byan-chub-sems-dpahi spyod-pa) を想起憶念しよう^⑥と欲しよ』

という。但しこの漢訳としては『大品般若』(大八、二二〇中)でも『大般若』(大五、一五中)でも訳されていない。

『華嚴経』の中では *Gaṇḍavyūha Sūtra* (ed. by D. T. Suzuki and H. Idzumi, 以下 *GV* と略記) にこの語が多く見いだされる。まずその p. 526 に、諸菩薩が世尊に懇請する語に、

『菩薩の諸の過去の因縁の大海 (bodhisattvapūrvayoga-samudra, byan-chub-sems dpahi snon-gyi sbyor-ba rgya-ntsho) を示されよ』

という。ここでは次に成道、転法輪等をあげて、仏伝を暗示するものであるが、右の文は仏の前生を暗示するのである。そしてもしそれを一々示すならば、すでに見たような過去の出来事を主題とする物語となるはずであろう。右の漢訳としては、仏駄跋陀羅訳『六十華嚴』(大九、六七七上)には、「菩薩本生海」、実叉難陀訳『八十華嚴』(大一一〇、三二〇上)には「往昔所有本事因縁」、般若訳『四十華嚴』(大一一〇、六六二上)には「往昔所集無量本事相應行海」という。そして *pūrvayogasamudra* の語は頻出し、その漢訳としては右の外に、実叉難陀訳および般若訳には「本事海」という。また単に *pūrvayoga* という場合もあり、(p. 248¹², 14, 17, 23)

その漢訳としては仏駄跋陀羅訳は「本事」(大九、七二五中)、
他は「相応事」(大一一〇、三七五上、七四四下)という。ま
た *pūrvayogasampad* (p. 418ⁱ、過去の因縁の成就) に対し
ては、「本生」(仏駄跋陀羅訳、大九、七五九下)、「本縁」(実
叉難陀訳、大一一〇、四一一中)、「本生因縁」(般若訳、大
一〇、七九四上)の訳語があてられる。

また、菩薩の形容としての *pūrvayogasampanna* (p. 94ⁱⁱ、
過去の因縁を成就している、具足している)は、方便道(仏駄
跋陀羅訳、大九、六九六下)、方便具足(実叉難陀訳、般若
訳、大一一〇、三四二上、六九一下)と訳されている。この場
合には、過去の因縁(あるいは前生の行為)のもつ力、功德
を主に指しているかのようにである。しかし *ṛṣṭi* は、「過去
の因縁」をもし具体的に語りうるとすれば、一種の過去世物
語となるであろう。

なお漢訳の本生、本事は、他では *jātaka*, *itivṛtaka* の訳
語と考えられるものでもある。しかし *GV* では *pūrvayoga*
の語を好んで用いているのである。

論書の中では *Bodhisattvabhūmi* (ed. by U. Wogihara)

Pūrvayoga (過去の因縁)

p. 67 に

『彼(菩薩)はその随念宿住智によって、衆生をして仏世尊に
対する淨信を生ぜしめんがためと、恭敬心を生ぜしめんが
ためと(世俗生活に対する)厭離心を生ぜしめんがために、
ジャータカ(本生、即ち過去の菩薩行・最高未曾有なる行
を、種々様々に説き明かす。また衆生の業果の異熟について
は、過去の因縁にちなむ本事(*itivṛtaka pūrvayogapra-
samyukta*)を(説き)、常見あるもの、即ち前際(過去の際限)
を分別する常見論者・一分常見論者の常見を滅する』

という。右の問題の語は、チベット訳では *shon-gyi tshul*
dan ldan-pahi de-ta-bu byun-ba (影印北京版 vol. 110, p.
149d^e = fol 43 b^e) であるが、漢訳では玄奘訳『瑜伽師地
論』卷三七(大三〇、四九四上)に、「先世相応」というのが
pūrvayogasamyukta の訳びであらう。

ṛṣṭi は、十二部経の「本事」(*itivṛtaka*, 過去世物
語)の説明として *pūrvayoga* が言われているのである。こ
れに関連して *Bodhicaryāvatāra Pañjikā* (ed. by Poussin)
p. 339ⁱ に *Suppuspacandrasya-itivṛtaka* (善花月〔法師〕
本事)と云って、*SR* 第三十五章に言及する。*SR* 第三十

五章は A' B 写本やチベット訳では pūrvayogakathānīrōṣa (SR. p. 526 n. 1) と呼ばれていたものでも。

1) 大乗経典 (SR) では、十二部経^⑥ niṣyattaka の名称を使わなかったが、論書 (註釈書) では用いている。
よくな。

(1) J. Einsink, *The Question of Raṣṭrapāla*, Zwolle 1952, p. 59, (英訳) Thus the king of jewels among the sutras containing the story of olden time, of the good man Pūyaraśmi is finished.

なまの経ごころは、拙稿「Raṣṭrapālapariprocā」の成立のごころ、「印度学仏教学研究」第十七卷第二号(参照)。

(2) Johannes Nobel, *Suvarnaprabhāṣotsaṃasūtra*, Wörterbuch Tibetisch-Deutsch-Sanskrit (Leiden 1950) S.49 以下 snon-hyuh-ba, früheres Geschlechts, pūrvayoga. よくな、
「過去の出来事」(一解)ごころ。

(3) J. Nobel, *Suvarnaprabhāṣotsaṃasūtra*, Die Tibetischen Übersetzungen mit einem Wörterbuch 1 (Leiden 1944), S. 9620-21

(4) J. Nobel 前掲書 p. 1535-26

(5) E. Conze, *Materials for a dictionary of The Prajñāpāramitā Literature*, Tokyo 1967, の指摘ごころ。彼は pūrvā-yoga-sahagata, connected with their previous lives 一解ごころ。44 Pañcaviṃśati p. 3012 以下 bodhisattvatām

ごころが、チベット訳および *Saṭasasrika* によつて訂正ごころ。チベット訳は『影印北京版西藏大蔵経』vol. 18 p. 55a⁵ = fol. 37a⁵, vol. 12, p. 26a², 4 = fol. 59b, 4f. を見よ。

なま snon-gyi shyor-ba は「過去のつながり」の意味でもごころ。

(6) 526, 161, 4, 5, 7, 8, 10, 12, 13, 15, 16, 3718, 916, 977, 9, 23424, 27125, 29911, 42514; cf. p. 711, 1020; pūrvayogamegha 9117, 23, 926, 9, 16, 24, 935, 13

(7) (美又難陀訳) 大10、三三三中、三七一中、三八〇中、三八七上、(般若訳) 大10、七四一上、七五一上、七五九中

(8) 宇井伯寿『梵漢对照菩薩地索引』六七頁には、「過去の修習と結合せる本事経」と訳している。但しその「単語」の部に「過去の転と結合せる yoga は煩惱の異名としての転と考えた」と説明するが、適切でない。

(9) 前田惠学『原始仏教聖典の成立史研究』(昭和39年) 第二編参照。(これは九分十二分教についての集大成である。)

7' pūrvayoga の語義 (総括)

以上 pūrvayoga の用例をなるべく多く挙げて、その漢訳、チベット訳および近代語訳をも参照してきた。すでに以上によつて、この語の示す意味もほぼ明らかとなったと考えられるが、今ここにその語義について要約したい。

まずこの語の漢訳およびチベット訳語を整理してみると、
ほぼ次の二種となる。

一、往古、古世事(空法護訳)、本事(鳩摩羅什、実又難陀訳)、本生(仏馱跋陀羅訳)、前際(那連提耶舍訳)、先世(玄奘訳)、*snon byun-ba* (過去に起つたこと) (SR)、*snon-gyi tshul* (過去の在り方、*Bodhisattvabhūmi*)

二、本事因縁(実又難陀訳)、本縁(実又難陀、那連提耶舍訳)、本生因縁(般若訳)、宿世因縁之事(鳩摩羅什訳)、縁(曇無讖訳)、昔因縁(義浄訳)、*snon-gyi sbyor-ba* (過去のつながり) (SP, GT)、*snon-gyi gte-ma rgyud* (過去の話のつながり、影印北京版 No. 174)

私は上來一貫して「過去の因縁」という訳語を用いてきたが、それは右の第二の訳語群に類することになる。もっとも「因縁」という語そのものが曖昧であるので、説明を要しよう。また原語の *Yoga* の語が多義であることが、この語の解釈を困難にしてきたのであるが、チベット訳の *sbyor-ba* は、*Yoga* の原意「むびつけること、つなぐこと」に対応する。*pūrvayoga* の原意は、「ある過去の出来事(行為)があつて、

pūrvayoga (過去の因縁)

それが何らかの意味で現世につながりを持つていること」を表わすものようである。「過去の因縁」もそういう意味で用いたのである。そしてこの意味は *pūrvayoga* の用例のすべてにあてはまる、と考える。次にこの語の用例としては、「過去の因縁」の物語、すなわち過去世物語を中心とする題名として、經典の章節の名称を構成している場合(-*pūrvayoga-parivarta*, °-*kathā*, °-*kāthānirdesa*, etc, SP, SR, RP) と、「過去の因縁」・過去世における行為あるは「とくにその力(影響)、功德をも示唆するような場合 (*pūrvayoga-samudra*, °-*caryā*; °-*sampanna*, °-*sampad*, *kṛta*°, GT, SP, *Me*) とに二分できるであろう。しかし前者の場合にも、その内容は過去世の行為とその力(影響)を語るものであり、後者の場合にも、何らかの意味で過去世物語を予想するものであろうし、その内容を具体的に示しうるとすれば、前者のよ
うな物語となるであろう。

pūrvayoga と称せられる章節(過去世物語)が、大乘經典にあることは、すでに詳しく見た。それは仏または菩薩の前生物語であり、過去仏の登場する物語であった。他方、仏

の前生話には *jataka* (本生) と呼ばれるものがあり、過去世物語には *avadāna* (譬喩)、または *īvṛtaka* (本事) と称されるものが知られている。この三つの名称は十二部経に含まれるものであるが、上に見た諸経 (*SP, SR, RP*) では、それらの名称を敢て使わず、*pūrvavoga* を用いたものと考えられる。^②

註(1) ちなみに『広辞苑』をみると「②由来。来歴。ゆかり」の説明をも与えている。

(2) この意味では、九分教や十二部経が仏説としての權威をもっていたので、大乘経典はその權威を借りるために、それと結びつけて説かれる必要があった、という如き説も再検討を要するであろう。上來みてきたように、大乘経典における過去世物語については、九分教、十二部経に含まれる名称を使わない理由も説明出来なければならない。ここに、なお問題が存すると考えるものである。

〔附記〕本稿は、さらに「九分十二部経と大乘経典」についても論及する予定であったが、与えられた紙巾も超過しているのので、それについては、他日稿を改めて論じたい。

なお九分十二部経と大乘経典との関係については、平川彰「九分十二部経の原型と大乘経典との関係」(『結城教授頌寿記念仏教思想史論集』所収。のちに『初期大乘仏教の研究』春秋社 昭和四十三年に改訂収録) 参照。また、山

田龍城『大乘仏教成立論序説』(平楽寺書店、一九五九年)、干潟龍祥『本生経類の思想史的研究』(東洋文庫、昭和二十九年)、同『本生経類と法華経の関係』(金倉圓照編『法華経の成立と展開』平楽寺書店、昭和四十五年、六〇七―六二三)、前田恵学「無量寿経のアヴァダナーナの性格」(『結城教授頌寿記念仏教思想史論集』一一―一二三頁) 参照。